

伊達市谷藤川溪谷の溪谷美と植物からみた希少性

木村 益巳

要旨

NPO 法人地域自然活動センター森・水・人ネットの紹介を簡単に行い、現在当 NPO 法人が保存活動を行っている希少植物と溪谷美が認められる伊達市谷藤川溪谷が、採石事業によって悪影響を及ぼされる状況を報告する。また、NPO 法人が行った谷藤川溪谷の植物に関する調査結果を示し、谷藤川溪谷が自然保護の上から重要な地域であることを述べる。

1 はじめに

NPO 法人地域自然活動センター森・水・人ネットは、設立3年ほどの発展途上の NPO(会員等約 80 名)ですが、「自然をまもる」「自然をいかしたしたまちづくり」を目的として、伊達市(人口3万7千人)を中心に西胆振において活動を行っています。主な活動として、自然観察会、自然の見どころづくり、展示・講話、座学・交流、自然保護調査、行政などへの提言、会報発行・ホームページ(<http://www12.plala.or.jp/MoriNet/>)公開、実践講座(人数限定)など、多面的に取り組んでいます。

伊達市は長流川や気門別川など多数の清流が内浦湾に注いでいる川のまちです。そのなかの谷藤川には、市内唯一と言える美しい溪谷があります(図1)。この周辺は私有地ですが、谷藤川溪谷は、多くの野生植物が生育している西胆振の重要な自然地域となっています。レッドデータブック掲載植物をはじめ貴重な植物があり、蝶などの昆虫も多くの種類が確認されています。以前から複数の理事が個人的に調査を継続していましたが、2013年からは当 NPO として観察会を行い、2014年は3回の調査を実施しました(写真1、2)。

調査実施期間中に、谷藤川溪谷で採石場計画があることを知りました。伊達市に計画の詳細の聞き込みに出かけましたところ、道の指導により場所や開発者などの情報を知らせることはできないという返事でした。そのため、今まで知りえた調査内容をもって、まず伊達市に要望書を提出し、続いて北海道にも同様の主旨の要望書を提出しました。現在でも伊達市からは情報がなく、かなり

時間がかかりましたが、今回の採石予定地の情報を入手することができました。採石予定地は、私たちが谷藤川溪谷と呼んでいるところの下流部の右岸一帯です(図1)。

私たちは、伊達市に対して次のような要望書を提出しました。

2 伊達市に提出した要望書の概要

伊達市に提出した要望書の概要(文章を多少修正した)を以下に述べ、谷藤川の自然の特徴をお伝えしたいと思います。

谷藤川溪谷は1.5 kmの範囲にわたって高さ50~300 mの断崖絶壁が続く、西胆振では特異な地形が見られます(写真3、4)。人の手が入りにくい断崖地形は、西胆振ではすでに見ることのできなくなった様々な植物を今まで保存してきました。特にカムイコザクラ(北海道レッドデータベースの絶滅危急種・国レッドデータベースの絶滅危惧 IA 類)やユキワリコザクラ(北海道レッドデータベースの絶滅危急種)などの貴重な植物が生育しています。カムイコザクラは日高山脈の固有植物とされていましたが、私たちの調査により伊達市谷藤川に隔離分布することが分かりました。また、ユキワリコザクラは道内に点在しますが、伊達市域では谷藤川付近にしか見られません。

長い年月をかけて形成された谷藤川の貴重な自然を未来に引き継いでいくことは私たち地域住民の責務であると考えています。自然は一度破壊されると元に戻すことはできません。近年では、2008年に生物多様性基本法が制定され、2013年には北海道生物多様性保全条例が制定されました。地域



図1 伊達市谷藤川の位置
挿入図の○は谷藤川付近を示す。



写真1 NPO 法人地域自然活動センター森・水・人
ネットの仲間たちによる谷藤川渓谷調査
(まぼろしの滝 (仮称) にて、2014年8月、篠原盛雄
撮影)



写真2 NPO 森ネット主催の谷藤川渓谷市民観察会
(2014年7月、木村益巳撮影)

の自然の多様性、生物の多様性を保全することが法的に整備されてきていますが、具体的な保全計画は今後に向けて始まったばかりです。

西胆振では、2011年の東日本大震災の復興の名の下、数か所で大規模に採石が行われていますが、この採石には、環境影響評価がまだ義務づけられていないため従来の「採石法」が適用されたままです。このまま安易に採石が許可されますと、伊達市の掛け替えのない自然が破壊されていくことになりかねません。伊達市として、この問題を総合的に評価・判断していかなければならない時期にあると考えます。

谷藤川渓谷に隣接する土地は私有地ですが、この渓谷は伊達市において他にはない非常に貴重な場所です。この自然な地域を保護し、未来に引き渡していくことが行政としての責務でもあると考えます。谷藤川は市内を流れる清流の中でも、最も親しみのある言わば故郷の川です。開拓時代以来、先人がこの川から水を引き田畑を潤し、伊達市の発展を支えた母なる川と言っても言い過ぎではありません。谷藤川渓谷の天狗岩は、多くの市民が眺め、慣れ親しんでいる身近な存在です。また谷藤川の渓谷美は近隣にない価値のあるものです。そのため、ここは、以前から子どもたちが遠足などで訪れる場所であり、現在でも多くの市民が訪れ、各種の自然観察会が開催されています。

この流域は、調査がまだ不十分のため、まだまだ貴重な生物がこの流域に生息していると考えられます。この流域の保全を願う市民も決して少なくないので、NPO 法人地域自然活動センター森・水・人ネットは以下の2点を強く要望いたします。

- (1) 伊達市の環境条例・緑の基本計画の精神から、伊達市独自の自然環境調査を実施し、保全対策について市民等と共に具体的に検討することを要望いたします。
- (2) 伊達市全域がジオパークですが、特に谷藤川渓谷はジオサイトとして高い価値をもつ場所です。学習の場・名所として保護指定の検討を要望いたします。

3 伊達市内の他地域にはほとんど見られない谷藤川渓谷の見どころ (保護が必要な植物)

谷藤川の植物が貴重なことを簡単に述べたいと思います。

- ① 5月下旬は、サクラソウ属3種(カムイコザクラ・ユキワリコザクラ・オオサクラソウ)が咲き、白色のオオカメノキ、赤紫色のムラサキヤシオが岩肌を彩る。その後、ヤマツツジが岩肌や尾根を染める。コメツツジ・コヨウラクツツジ・ホツツジなどもある。6月中旬にはミヤマハンショウヅルが咲く。
- ② ダイモンジソウ(大文字草)は花が漢字の「大」に見えることからこの名がある。谷藤川橋を渡り、稀府岳側の岩場が出現したところから始まり天狗岩橋の少し手前まで約1 kmの間、切れ間なく分布するので、8月下旬の花盛りの頃はすばらしい。このようなところは伊達では見たことがない。
- ③ 断崖に生育するイワキンバイ・センボンヤリ・イブキジャコウソウ・マルバキンレイカなど。特にイワキンバイは、天狗岩橋の上流、紋別岳側の断崖全体に、ユキワリコザクラと混生して数多く分布する。
- ④ タニウツギやシロザクラが咲く。谷藤川橋から天狗岩橋付近まで、道路沿いに延々と続くエ



写真3 5月の谷藤川渓谷。天狗岩橋から上流 (2009年5月、木村益巳撮影)

ゾアジサイは7月に見ごろを迎える。

4 伊達市と北海道からの回答の要旨

伊達市から以下の回答があった。すなわち、(1)について、市では独自に調査することを考えていない。保全対策については関係法令に基づき適正に対応していく。(2)について、ジオサイトの指定については、洞爺湖有珠山ジオパークにおける学識顧問会議等で検討することになっている。そのため、ジオサイトとして認定するにあたり該当箇所の資料等の収集などの調整が必要ですので、事務局と協議を進めていく。

ところが、市は前言を翻し、「紋別岳は審議の対象になっていないのが現状」(2015年1月16日市環境白書意見への回答)と言い出した。

北海道からの回答は、(1)事業者から開発申請がないので詳細に把握していないが、伊達市に確認したところ、開発予定区域は渓谷部分に直接接していないので、渓谷周辺への影響は少ないものと思われる。(2)自然環境の調査については、3つの理由を挙げて、実施の予定がないので、ご了承願う。

この北海道からの回答において、まず、本当に渓谷部分に接しないのか、土砂流出などの河川への悪影響がないのか、詳細計画を求めなければなりません。また、北海道が調査しない理由の一つに「当該地域の自然環境に関する知見が十分蓄積されておらず、科学的にその価値の評価が可能となる学術資料等の情報がないこと」がありますが、この報告が一つの学術的な評価になり、また、さらに詳細調査が必要であることを示しております。

谷藤川渓谷は、当NPOが守るべき自然として保護調査を求めました。しかし、その開発行為に対してどう保護するか、周辺が私有地であるため



写真4 谷藤川の清流 (2005年11月、篠原盛雄撮影)



写真5 カムイコザクラ
(天狗岩橋の下流左岸側にて、木村益巳撮影)



写真6 ユキワリコザクラ
(天狗岩橋の下流左岸側にて、木村益巳撮影)



写真7 オオサクラソウ
(天狗岩橋の上流左岸側にて、木村益巳撮影)



写真8 コハマギク
(天狗岩橋にて、木村益巳撮影)

困難な面もあります。それでも、渓谷美を形成する河川そのものは道民の財産ですので、そこを保護するため、そこへの悪影響を避けるための調査を求めていると考えています。

5 植物からみた谷藤川渓谷の希少性 (付記：植物目録)

当 NPO の調査により把握してきた植物と、佐藤謙氏（北海学園大学教授・北海道自然保護協会前会長）との合同調査（2014年8月7日）によって把握した植物をあわせると、それぞれ短期間の調査、かつ狭い範囲における調査でしたが、谷藤川渓谷の植物として以下の243種が挙げられ、かなり多様な植物が認められました（表1）。

レッドデータブックに掲載された植物として、フクジュソウ（北海道の絶滅危急種 Vu、国の絶滅危惧 II 類 VU）・ヤマシャクヤク（道の R、国の

VU）・シラネアオイ（道の Vu）・オクエゾサイシン（道の R）・エゾシモツケ（国の絶滅危惧 IB 類 EN）・カムイコザクラ（道の Vu、国の絶滅危惧 IA 類 CR：写真5）・ユキワリコザクラ（道の Vu：写真6）・オオサクラソウ（道の R：写真7）・コハマギク（道の R：写真8）の9種は、とくに保護が求められます。また、断崖に生育する高山植物（高と短縮形で示す）と岩隙・岩礫地植物（同様に、岩と示す）の合計25種は、上記と4種が重なりますが、上記種と同様に希少ですので保護すべきと考えられます。なお、コハマギクは、ふつうは海岸の崖地に生育します。それに対して、この地域のコハマギクは内陸側に生育することから、アポイ岳付近とともに例外的な生育地の事例になります。

上記のカムイコザクラは、ヒダカイワザクラ（アポイ岳やチロロ岳など日高山脈のかんらん岩地に限られる北海道固有種）の変種と見なされており、

表1 伊達市谷藤川溪谷付近に見られる植物

木本植物 (1) 高木種 (28種)

エゾノバツコヤナギ・オノエヤナギ・イヌコリヤナギ・オニグルミ・サワシバ・ウダイカンバ・シラカンバ・ダケカンバ・ケヤマハンノキ・ミズナラ・クリ・ハルニレ・オヒヨウ・カツラ・ホオノキ・キタコブシ・ミヤマザクラ・シウリザクラ・ナナカマド・アズキナシ・イヌエンジュ・ヒロハノキハダ・ヤマモミジ・イタヤカエデ・アカイタヤ・シナノキ・ミズキ・アオダモ

木本植物 (2) 亜高木種と低木種 (30種)

ミヤマハンノキ・ヤマグワ・ノリウツギ・エゾアジサイ・エゾシモツケ (岩)・クマイチゴ・クロイチゴ・ナワシロイチゴ・エゾヤマハギ・サンショウ・フッキソウ・ミツバウツギ・ハウチワカエデ・タラノキ・ホツツジ・コヨウラクツツジ・コメツツジ (岩)・ヤマツツジ (岩)・ムラサキヤシオ・ハナヒリノキ・ハクウンボク・ハシドイ・ムラサキシキブ・クサギ・エゾニワトコ・オオカメノキ・タニウツギ・チシマザサ・クマイザサ・スズタケ

つる植物 (11種)

ミヤマハンショウヅル (高)・チョウセンゴモシ・ツルアジサイ・ウスバヤブマメ・ツタウルシ・オニツルウメモドキ・ヤマブドウ・コクワ・マタタビ・イケマ・イブキジャコウソウ (岩・高)

草本植物 (1) シダ類 (18種)

スギナ・トクサ・ヒメスギラン (岩)・ゼンマイ・オウレンシダ・クジャクシダ・イヌガンソク・クサソテツ・イワデンドウ (岩)・ジュウモンジシダ・ニオイシダ (岩)・オシダ・イワイタチシダ・ミヤマワラビ・オオメシダ・ミヤマシケシダ・エゾメシダ・ヘビノネゴザ

草本植物 (2) 他の草本類 (135種)

ヒトリシズカ・フタリシズカ・エゾイラクサ・ムカゴイラクサ・アオミズ・アカソ・クサコアカソ・オクエゾサイシン・エゾノギシギシ・ミズヒキ・ミゾソバ・タニソバ・オオイタドリ・シラネアオイ・ヤマシャクヤク・キクザキイチゲ・ヒメイチゲ・フクジュソウ・ヤマキツネノボタン・アキカラマツ・ミヤマカラマツ・エゾトリカブト・ルイヨウショウマ・サラシナショウマ・エゾキケマン・エゾエンゴサク・ムラサキケマン・クサノオウ・コンロンソウ・ワサビ・ホソバキリンソウ (岩)・エゾキリンソウ (岩)・イワベンケイ (高)・トリアシショウマ・エゾクロクモソウ・ダイモンジソウ (岩)・ツルネコノメソウ・ヤマブキショウマ・イワキンバイ (岩)・ミツバツチグリ・オニシモツケ・ナガボノシロワレモコウ・キンミズヒキ・キツリフネ・ツリフネソウ・オトギリソウ・アイヌタチツボスミレ (岩)・タチツボスミレ・タニタデ・アカバナ属の1種・ウド・ウマノミツバ・ヤブジラミ・ミツバ・ミヤマセンキュウ・ヤブニンジン・ミヤマトウキ (岩)・アマニュウ・エゾニュウ・オオハナウド・オカトラノオ・ユキワリコザクラ (岩・高)・カムイコザクラ (岩・高)・オオサクラソウ・ハナイカリ・フデリンドウ・カキドオシ・カワミドリ・ウツボグサ・ミヤマトウバナ・エゾタツナミソウ・ヤマハッカ・ミゾホオズキ・ハエドクソウ・エゾカワラマツバ (岩)・オククルマムグラ・ヤエムグラ・ミヤマキヌタソウ・クルマバソウ・レンブクソウ・マルバキンレイカ (岩)・オトコエシ・モイワシャジン (岩)・ツリガネニンジン・ノコギリソウ属の1種・ヤマハハコ・ミヤマヤブタバコ・センボンヤリ (岩)・ヒヨドリバナ・ヨツバヒヨドリ・コガネギク・アキノキリンソウ・エゾムカシヨモギ・エゾゴマナ・シラヤマギク・エゾノコンギク・コハマギク (岩)・アキタブキ・ハンゴンソウ・ヨブスマソウ・イヌヨモギ (岩)・オオヨモギ・ノブキ・チシマアザミ・サワアザミ・トウヒレン属の1種・コウゾリナ・ヤナギタンポポ・ニガナ (変種シロバナニガナを含む)・ヤマニガナ・ハチジョウナ・ヤクシソウ・ヒメノガリヤス・ウシノケグサ (岩・高)・ケチヂミザサ・ススキ・ショウジョウソグ・ヒメカンスグ・アズマナルコ・ヒメシラスグ・コウライテンナンショウ・ツユクサ・ギョウジャニンニク・オオウバユリ・エンレイソウ・ミヤマエンレイソウ・クルマバツクバネソウ・ツバメオモト・ユキザサ・ヤブカンゾウ・ハクサンチドリ (高)・ノビネチドリ・ネジバナ・スズムシソウ

植栽木・帰化種・人里植物・移入植物 (21種)

トドマツ (植栽木)・カラマツ (植栽木)・ハナタデ・イヌタデ・コハコベ・ナズナ・アカツメクサ・シロツメクサ・ゲンノショウコ・メマツヨイグサ・ヒメオドリコソウ・タチイヌノフグリ・オオバコ・オオアワダチソウ・ヒメジョオン・セイヨウタンポポ・オオハンゴンソウ・コヌカグサ・カモガヤ・スズメノカタビラ・クサイ

かんらん岩地を除く日高山脈全域に分布することが知られていました。そうした植物が、私たちの調査によって日高山脈から隔離して分布していることがわかりました。以上のことから、この地域の植物はかなり重要と言えますが、2015年以降はさらに時間をかけた調査を実施したいと思っています。

表1の植物目録は、生活形(木本植物・つる植物・草本植物など)ごとに、またそれぞれにおいては分類順に植物名を列記しました。なお、植栽木・帰化植物・人里植物・移入植物として21種が挙げられましたが、人工林植栽木以外の植物は人

為的攪乱が著しい林道に限られていましたので、それらを合わせて最後に別記しています。

謝辞

谷藤川の調査資料をご提供くださり、また分類整理にご指導いただいた佐藤謙氏に対して厚くお礼を申し上げます。

木村 益巳 (きむら ますみ)

NPO 法人森・水・人ネット代表理事。北海道自然保護協会会員。自然観察指導員。市民の自然観察会主宰。伊達市市民参加推進会議委員。伊達市環境美化条例の制定に参加。伊達市の縄文の森づくり・野草園づくりに参加中。北海道新聞「自然大好き」を2002年から連載中。伊達市在住。